

平成 24 年度第 1 回建築学教育 FD/ICT 活用研究委員会議事概要

- I. 日時：平成 24 年度 6 月 25 日（月）16：00 ～ 18：00
- II. 場所：公益社団法人私立大学情報教育協会事務局・会議室
- III. 出席者：衣袋委員長、渡辺委員、澤田委員、真下アドバイザー、関口アドバイザー
（事務局）井端事務局長、森下主幹、野本職員

IV. 議事概要

1. 教育改善モデルを実施するために必要な教育力について

参考資料から意見交換がされた。

- ・ 教員毎に温度差のある「教育力」について問題提起あり、教員の評価、テニユア審査、教育業績、自己点検、米国での実践など。
- ・ 大学に期待される取組として、FD 機能と活性化、参加者へのきめ細やかな配慮、教員に対する顕彰や教育方法改善に向けた援助、ティーチング・ポートフォリオの導入・活用など。
- ・ 国によって行われるべき支援・取組について（実質的には大学の主体性を求めている）。
- ・ 予測困難な時代の個人と社会、今果たすべき学士課程教育の役割、学修時間に着目、全学的な教学マネジメントとガバナンスの確立について、特に大学生の学習時間では米国との比較。
- ・ 文科省は大学の取組に応じて国立大運営費交付金や私学助成を配分する方針である。
- ・ ボイヤーのスカラシップ論、発見・統合・応用・教育の学識について、統合の学識として隣接・関連領域への目配りが必要であり、従来の分野を超えた連携、変化・流動化傾向である。応用の学識として現場の問題から理論を検証・再構築する知のスパイラルアップが必要である。教育の学識として関連領域を十分に理解した上での教育が必要である。

2. 建築学教員の教育力について主な議論の内容

- ・ 冒頭に、各専門の「教員の教育力」記述に重なる部分が多いことから、教員すべてに求められる学識の共通項を括り出すべきではないかという意見が出たが、すべての委員会で共有するためにも各専門で記述する方針であることを確認した。
- ・ ここで扱う「建築学」には、都市・地域も入っていることを確認した。
- ・ 特定の学識だけではなく、ボイヤー教授のいう「発見・統合・応用・教育」の学識の上に専門性を持つべきである。
- ・ 統合的なバランス感覚に基づいた応用力が期待されるべきである。
- ・ 学生自身に考えさせる、学生の考えを引き出すような動機付けが必要である。
- ・ 様々な事象から見出し、まとめ、利用する統合的視点をもった教員が必要である。
- ・ 各々の学生の目線に合わせる必要がある。
- ・ 卒業設計で行われている例で、ホリスティック・デザイン実現を念頭に置いた、芸術と技術をひとまとまりにして考える取り組みは参考にできる。建築・構造・設備が一つのチームとして卒業設計に取り組んでいる。

3. 議論を経て、各項の記述内容を下記として確認した。下線部分は、他の専門との共通事項或いは特に議論されたキーワード。

- ① 生活環境の安心・安全・健康な社会の構築に対する使命感と責任感を身に付けていること。
- ② 建築学的な観点で科学技術社会の現状を振り返り、将来の地球及び地域社会における影響を多面的に予見できること。
- ③ 学生と同じ視点で建築学の問題発見・解決に必要な情報の収集・分析・統合及びそれらを的確に表現できること。
- ④ 建築と社会の多元的・複合的な価値に配慮し、環境、地域及びグローバルな視点で共生を考えイノベーションに貢献できること。
- ⑤ 建築学及び建築学以外の他分野、社会・地域との協働作業（コラボレーション）ができること。
- ⑥ 持続的社会の発展と建築学の関係を学生に気づかせ、主体的に取り組ませることができる。
- ⑦ ICTを駆使して、仮説・検証の教育ができ、ネットワークを介して世界と情報共有ができること。

V. 次回の開催日程

- ・日時：平成24年7月23日（月）16：00～18：00